

■マルティナさん vs ショタ痴漢

世界を救うため、各地を旅する女闘士マルティナ。今日は立ち寄った町で少年の依頼を受け、とある学園の図書室に来ていた。

図書委員をしているという少年曰く、最近図書が紛失する……つまり盗難事件が増加しているらしい。そこでマルティナに何とかしてもらえないか、という話だった。

闘士であるマルティナにとって、本来の役割は魔物の討伐。だがせっかく平和になった町の犯罪行為とあっては見過ごすことはできない。二つ返事で承し、問題が起きやすい時間に訪れる約束をしていたのだった。

(なるほど……かなり混んでるね)

指定された時間に来たマルティナは、図書室が予想外に賑わっていることに驚く。なんでも図書委員の少年によれば、この学園は狭く教室も少ないので、その代わりにこの図書室を使われることも多いのだとか。また、学園以外の人間にも使用を許可しており、学生以外も多く来ている。今のように昼前などでは、満席になることも珍しくないらしい。

確かにこうもごった返していると、図書委員の監視の目が届きにくい場もあるだろう。そこを狙って盗難しているということか。

マルティナは状況を把握し、図書委員から本を借りる。

……今のマルティナは図書室の中でも目立ちにくいよう、服装は普段のものではなく、旅の途中で寄ったメダル女学園の制服を着用している。幸いにもこの学園の制服とデザインが似ており、服装が原因で目立つことはないだろう。

こうしてこの場に溶け込みやすい姿となり、図書室を利用するフリをして監視要員となる。それが今回のマルティナの仕事だ。

人目につかない場で犯行をする人間は、見られるという行為に対し非常に敏感。監視の目が一つ増えたことで、かなり盗難抑止になるという。無論、それでも盗難行為が発生した場合は琴を荒立てずに注意する。念のためを考え、体術に優れるマルティナが選ばれたというわけだ。

監視要員として、図書委員では注意がしにくく、盗難が多発している本棚に近い席に座る。本を読むフリをしつつ、たまに本棚を見る。余裕があれば周囲にも視線を配り、不審な点がないか確認する。

……と、しばらく言われた通りにやってみるが……それらしい人物は見当たらない。人が多いためか、単に盗難現場に出くわしていないだけかは不明だが……少なくとも現時点で、特に不審な部分は見つからなかった。

(まァ……そう都合よく出くわさないわよね)

そもそも、問題など起きないに越したことはない。はっきりと効果が出ているか分からないが、もしかすればマルティナがこうして監視していることが効いているのかもしれない。そう思いながら本を読むフリを続けると、右隣の席に男子が座る。監視行為がやりにくくなるため少し邪魔になるが、混んでいるので仕方ないだろう。しかし、そこで左隣にも男子が座る。依頼をしてきた図書委員の少年だ。

(? 様子を見に来たのかしら……それともなにか連絡?)

少年は視線で挨拶した後、ノートに文字を書く。監視行為が気付かれないう、連絡はこうやって自習のフリをして筆談形式をとるよう言われている。

『監視お疲れ様です。現在盗難は発生していません。このままよろしくお願いします』

文章を書いたノートをマルティナに見えるよう位置し、現状報告。どうやら監視が役立っているようで、引き続き続行するよう頼まれる。

マルティナも持参した用紙に書き、了承の意を返す。そこで少年は更にノートに書き足した。監視体制などに何かあったのかと思いきや、本来の依頼とは関係なさそうなことを伝えてきた。

『ところで、最近広まっているらしい結界魔法をご存知ですか？』

(魔法……？ 噂で聞ってるやつかしら……)

魔物の侵攻により、人間にも悪用しやすい魔術の情報が広まった。その中の一つに、結界術というものがある。魔力で結界を張ると、その中での出来事……動作や音などは遮断され、結界外の人間には一切気付かれなくなる、というものだ。

(もしかして、盗難犯はそれを使ってるかもしれないってこと？ だしたら厄介ね……)

息がかかるほど近距離での出来事も、知覚できなければ対処できない。もしその結界術が実在し、盗難犯が使っているとしたら監視は困難になるだろう。そのことを伝えたかったのかと思ったが、少年は更にペンを走らせる。

『この結界術、盗みにも使えますが……痴漢などにも利用されるようです。注意してくださいね』

(痴漢?! た、確かに、使えそうね……………! まさかっ!)

少年がノートを見せると共に見せた、意味深な笑み。その時になり、マルティナは気付く。自分と図書委員の少年を包む、薄らとした魔力の壁が出来ていることに。

噂の結界術……それが、凝視しなければ気付けないように展開されていたのだ。

(これが結界魔法？ ということは、この子が……!)

そのことにマルティナが気付く、少年——状況的に、結界術の使用者——から離れようとする前に、少年が手を伸ばしていた。スカートの上から股間に手を添え、指先だけで触れてくる。れっきとした痴漢行為であり、先ほど筆談で語っていた存在は自分自身のことであるというのを、その動作だけで暗に示していた。

「っ!？」

(なんで？ 身体が、動かない……声も……! いえ、これは……!)

犯罪を止めようとしていた少年が、実は悪質な痴漢である——そうと分かれば、のんびり筆談する必要などない。まずは下半身に触れる厭らしい手を弾こうとするが……不思議なことに、身体が動かない。更に声も出ない。

しかしそれはアストロンにかかったように全く動かないわけではなく、むしろマルティナ自身が抵抗を躊躇っている、という感覚だ。

自身の中で何が起きているのか。即座に理解できないマルティナに、隣のペンが解答を出す。

『そうそう、痴漢が使う結界は、対象の羞恥心を非常に強める効果が付与されることもあるそうです。どれだけ強気な女性でも、触れられた途端に恥ずかしさで身体がほとんど動かさず、声も出せなくなるのだとか』

スカート越しに太股の感触を確かめつつ、追記による皮肉が足される。

『一度ハマッたら二度と抜けられませんので、せいぜいご注意を』

「……………」

(無理矢理声を奪うんじゃなく、羞恥心で抵抗を封じるなんて……卑劣な……っ！)

結界により強制的に植え付けられた、異常に強い羞恥の感情。

それが痴漢に対処する行為を躊躇わせているのだ。

(感情の強制操作?! こんな強力な効果があったなんて……ひっ?!)

噂では聞かなかった効果に驚くマルティナ。しかしそれだけではないとばかりに、少年が手を動かす。スカートの中に潜り込ませ、ゆっくりと太股をなぞり……脚の付け根に到達。そこから下着のラインに沿って更に進み……秘部の割れ目と陰核が、ほんの軽く触れられた。

「ひあっ♡」

瞬間、強い快感が炸裂。なぜか秘部と陰核……いや、肉体全てが、丹念に愛撫しなければ到底辿り着けない感度になっており、ただ触れただけで身体の芯に深く浸透する性感が発生したのだ。

(これ……まさか……!)

『あと、最近性欲と性感を高める方法も発見されたそうです。不感症な女性でもすぐに濡れて、気持ち良さのあまり病み付きになるそうです』

(そんな……こんな魔法があるなんて……!)

なんとかして逃げないと……羞恥心なんて……気にしてる場合じゃ……)

動けないのは羞恥心と快楽のせい。となれば、強い意志と自制の精神を保てれば抵抗できるはず。恥を晒すことになると、このままでは更なる辱めを受けてしまう。そう思い、闘士としての修業生活で鍛えた精神力で恥を耐え、ゆっくりとしか動かないが、なんとか腕を移動させる。股間の上で蠢く少年の手を掴み、このまま捻じり上げようとした時……

『ちなみに、とある痴漢の結界は音のみを遮断するようで。下手に動けば近くの人に気付かれますからお気を付けて』

「っっ!!」

再びノートから伝わる情報に、結界外の視線を意識させられたことで羞恥心が増幅。不自然な動きを右隣の男子に見られてはならないという衝迫に駆られ、抵抗の手の力が抜けていく。

結界は術使用者と対象の姿と音を周囲から遮断することで、犯罪行為を誰にも気付かれず実行する術。だが少年は敢えて姿はそのまま見えるようにし、代わりに発情と羞恥効果によって対象……マルティナが抵抗できなくしているのだ。

女性を辱めるための悪質な魔法に、女闘士は悔しさを掌に握るしかない。

(これじゃ……抵抗、できないじゃない……っ！)

少年は最初からこれが狙いで、マルティナに嘘の依頼を持ちかけたのだろう。人の多い時間帯を選び、痴漢しやすい状況を作る。でっち上げた盗難犯に意識を向けさせ、自身の魔力に気付かせず、隙を見て一気に結界で包囲。あとは強制的に羞恥と性感を与え、思うが儘というわけだ。

(なにか……なにか、対策は………あっ！)

少年の指がまた動き、陰唇の下に潜って会陰を刺激。強引な愛撫だが、結界の効果によって発情した身体は素直に触れられただけの快感を得てしまう。

『どうかしましたか？ 勉強のフリをしないと、犯人に怪しまれますよ』

白々しく伝えられ、慌てて持ってきた書物を読む格好をとる。両手を机の上に置いたせいで下半身が完全に無防備となり、スカートの下の手に遠慮なく痴漢行為を励まれる。だが右の男子に気付かれないためには、こうするしかない。せめて男子にも痴漢少年にも表情を見られまいと、早くも上気して朱くなりつつある顔を俯かせる。

(落ち着いて……！ 性欲なんて、気合で抑えるのよ……！)

こんな強力な魔法、長く続けられるわけないもの……切れた時に、反撃を……！)

すり♥ くにく♥ ずりゅうっ♥

(は、反撃……を………っ♥)

これほどの魔法、長く展開し続けられるはずはない。ならば時間切れになるまで耐え抜き、その瞬間に反撃に転じればいい。対策を思いつき、今はどうにか耐えようとするが……指先が甘く陰唇を擦り上げると、ジンジンと皮膚が熱くなり、秘部の内側が疼いてくる。抵抗の意識すら消えそうな快感に、思わず臀部を左右に揺する。

「っ……っ♥ ……っ♥ ん……♥」

快感によって溢れる甘い声を、羞恥心で押し隠す。だがその羞恥……秘部に触れられること、隣人に見られるかもしれないことへの恥ずかしさすら快感に変換されているのか、下半身に生じた熱は止まらず拡大していく。

高められた性欲に意識まで変えられているのか、『痴漢されるのはこんなにも気持ち良いのか』という悦びにさえ目覚めそうだ。

くにく……くちゅっ♥ ぐちよお……ぐちゅうっ♥

「ふ……は♥ あ……っ♥」

(濡れてる……♥ そんな……まだ少ししか、触られてないのに……♥)

痴漢快感に目覚めたためか、更に熱の浸透が深くなる。牝の入口が独りでに開花し、刺激に応じて中から恥蜜が滲み出る。

蜜が音を立てれば濡れていることを自覚させられ、痴漢されたことで、しかもほんの短時間で感じてしまったのだと思い知らされる。

(違う……感じてなんか♥ こんな……すぐ隣に、男の子がいるのに♥
痴漢なんかに……あっ♥ クリはダメっ♥)

少年の指が再び陰核に触れる。すっかり硬くなった陰核は刺激に悦び、脈打って腰が引っ張られるような気さえてくるほど。肉真珠の快感がこれほど高まるのは初めてであり、いよいよ抑えが利かなくなってくる。

「ふぁ……っ♥」
(パンツの、中に……♥ やめなさい……っ♥ 痴漢のクセに……そこまで……っ♥)

もう充分にほぐしたと判断したか、責めの段階が進む。とうとう下着の中にまで滑り込み、直に触れてくる。布越しではない直接の摩擦が加熱した肌を追い詰め、気付けば既に秘部から内側……肉壺は、完全な牝として出来上がっていた。

(あ……♥ これ、ダメ……♥ 今は……♥)
ずりゅ……ぐちゅっ♥ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうっ♥
「っっ♥ 〜〜〜っ♥」
(今っ♥ 中はっ♥ ダメえええっ♥♥)

指が遂に膣内へと侵入。開ききった花卉は少年を全く拒まず、むしろ内側の蠕動と充血具合で敏感な部分を教えてしまい、そこを徹底して連打される。陰核も同時に叩かれ、上と下から押し潰されるような感覚に快感の波は一気に昂ぶる。快楽の急激な昂ぶり……絶頂が近付いているのだ。

植え付けられた性の欲求が、このまま絶頂に達してしまいたいと訴える。だが痴漢された挙句に絶頂させられるなど、女闘士のプライドが許さない。歯を食い縛り、息を詰まらせて堪える最中……少年が、最後にノートで伝言を見せる。

『俯かれては困ります。ちゃんと周りを見てもらわないと』
(周り……っっ♥♥)

監視を催促するという体で、シャットアウトしていた周囲への意識を再開させられる。大勢の生徒、学園外の者、右隣の男子……それらの存在を再確認した途端、更に欲熱が一段階膨張。

羞恥の快楽が視姦願望を生み出し、大勢の中にいると意識したことで、見られてもいけないのに視線に犯されていると錯覚したのだ。視姦に晒され、羞恥心を生み……それが快感に変換する。下半身全体がぶるっと一つ震えた瞬間を狙い、少年の指が陰核を内と外から挟み潰した。

(いやっ♥♥ ダメ♥♥ そんな♥♥ こんな大勢に見られて♥♥ 気持ち良くなんかつ♥♥)

ぐちゅううつ♥♥

「あっ♥♥」

(イク♥♥ イカされる♥♥ ダメ♥♥ 痴漢なんかにつ♥♥ あ……——♥♥)

「——つつ♥♥♥♥」

限界寸前の牝肉に耐えられる刺激ではなく……ピクンと首を仰け反らせ、無言の叫びを上げる。

……とうとう、達してしまった。時間にしてそう長くない痴漢行為に、感じさせられ、しかも絶頂させられる。女として、闘士としてこの上ない恥に、顔が点火したように染まっていく。

しかし、絶頂の余韻に呆ける暇はない。右の男子が驚き、心配そうな目で見つめているのだ。そしてちょうど、結界も時間切れとなり解除された。となると、痴漢されていること、それにより快感を得ていることが知られてしまうかもしれない。

極度に高まった羞恥心のあまり、反撃を忘れたマルティナは立ち上がり、急いで退室するのだった。

◆

「はっ♥ はあ……っ♥」

(有り得ない……！ あ、あんなことが……っ！)

結界に逆らえず、成すが儘に牝とされてしまったこと。少年に反撃できなかったこと。全てがいつものマルティナとは思えない事態であり、頭の中で否定と言い訳を繰り返す。

過ぎたことはもう変わらない。とにかく今は学園から抜け出し、少年への反撃に備えるべきだ。そう思うマルティナだが、闇雲に走ったせいで迷ってしまい、出口ではなく食堂に来ていた。

今はちょうど昼時であり、やはりここも人が多く集まっている。もはや行列の体を成さず、ただの人だかりとなっている。

(隠れるにはいいけど、これじゃ身動きが……あっ！)

しかもその群衆に吞まれてしまい、まともに移動ができなくなってしまう。お陰であの少年からは身を隠すことが出来るだろうが……そこでまた、新たな問題が発生する。

「っ！」

(ま……またなの……？)

スカート越しに触れる、人肌の温かさ。……あの少年とは別の少年が、マルティナに痴漢しているのだ。

抵抗し辛い人群れの中での犯行。先程と似たようなやり口に、八つ当たりに近い怒りが込み上げる。すぐさま尻を触る手を掴み上げ、護身術の要領で拘束する——そう思案した矢先。

「つつ♥」

(こ、この感覚……♥ また……っ♥)

自分と後ろの少年の周りに張られた、魔力の壁。……結界術が、この痴漢少年によって使用されたのだ。この

少年の結界も似たような性質らしく、再び羞恥心と性感が急増。鎮まりかけていた痴漢欲求がまたも昂ぶり、早くも快感を得てきていた。

【見ない顔だね。お姉さんもこの食堂目当て？ 学園外から来る人、けっこう多いんだよねー】

「っ……！」

【でもいけないなあ、こんな美人が混雑した場所に来ちゃ……だから痴漢なんてされるんだよ】

昂ぶった羞恥で声や動きを抑えるマルティナに対し、少年は結界内だからか、囁くような小声とはいえ遠慮なく語りかけてくる。

【気付いてると思うけど、魔力で結界を作ってるんだ。この中にいると……ほら、気持ち良くなってくるでしょ？】

「あ……っ♥ や、め……♥」

(そんな……♥ また……学園の中で、痴漢……されるなんて……♥)

逃れられたと思いきや、またも痴漢に遭ってしまう。雄欲を惹きつける自身の美貌を恨みながらも、身体は逆に少年の手による刺激を求めてしまう。

【顔トロけてる？ 結界の発情効果を気に入ってくれたみたいだね。じゃ早速、中に入らせてもらいまーす♪】

「あ♥ あ……♥」

(ダメ、なのに……♥ また、抵抗、できない……♥ 今は……ダメなのに……♥)

先の痴漢快感がぶり返しており、しかもまだ秘部は濡れたまま。今の状態でスカートの中に手を入れられるのはまずい。

しかし、下手な抵抗をして結界の視覚遮断が解除されれば、痴漢被害の現場を大勢の前に晒すことになってしまう。大衆に痴態を見せてしまったらと思うと、恥ずかしさと恐怖……それにつられて高まる性感で何もできず、少年の手の侵入を許してしまう。

(お尻に♥ 手が……♥ お願い、いっそお尻だけ……っ♥)

少年が真っ先に触れたのは臀部。一見して細身なマルティナだが、胸と尻の肉は不本意な発育を経ており、少年の手では覆い切れないボリュームを誇る。それが少年の趣味とマッチしたのか、歓喜が伝わるような驚握みを喰らって尻肉を震わせる。

だが、尻が触れられたのは不幸中の幸いだとマルティナは思ってしまう。何せ全部……陰唇の方は、まだ下着ごと濡れたまま。ここを触れられれば濡れていることが知られ、今以上の羞恥心に襲われるだろう。そうなのはまた絶頂しかねない。

最悪、濡れている部分にさえ来なければ、尻はいくら触られてもいい。そんな思いに至り、間接的にはあるが痴漢行為を望んでしまう。

「あ……♥ は……っ♥」

(お尻……気持ち良い……♥ だ、ダメっ、痴漢されてるのに♥)

でも……痴漢が……恥ずかしいのが……こんなに……っ♥)

【お姉さん、お尻気持ち良いの？ 感度スゴく良いんだね。……ていうかさあ……】

少年が意味深な沈黙。そして尻から指を離し、スカートから引き抜くと、マルティナの顔に近付けてくる。

(……！ ま、まさか……♡)

【見てよコレ。えらくびっしょびしょだね……おかしいなあ、ここまで感じる結界じゃないんだけどなあ】
「——っ♡♡」

少年が見せたのは、指先に付着したマルティナの愛液だった。秘部から零れた恥蜜は下着にたっぷりと吸われ、臀部の方にまで染み込んでいたのだ。

そこまで大量の蜜が流れていたとは思っておらず、マルティナは意外な形で自分の性感の高まりを知らされて羞恥心を倍化させる。

(こ、こんなに濡れてたなんて♡ でもこれは♡ 座ってたから、そのせいで染み込んで♡ 結界で、仕方なく♡)

【お姉さん、痴漢されるの期待してたでしょ？ 見た目通りのドスケベ女だね♪】
(違う♡ 私は……あぁっ♡)

スカートが捲られ、下着……恥蜜で濡れ、秘部に張り付いた布、痴漢に悦ぶ尻肉の形を見られてしまう。せめて嫌がらなければならないのに、恥辱快感が拒絶の意識すら薄れさせていく。

【いいねーこのお尻、痴漢されるためにあるような爆尻だね♪ それにパンツもけっこうキワどいね。やっぱり淫乱なんだ？】

「っ…………♡」
(よけいな世話よ……この、エロガキ……♡)

偶然ではあるが、今日の下着は黒色で布面積が小さ目なハイレグ気味のもの。セクシー仕様のものを着用していると知られて、ますます羞恥が増幅。

年下の男子に下着まで見られ、そのことで煽られるなど夢にも思っておらず、マルティナは真っ赤になって、力が入らない手でスカートを押さえる。だが前側だけ押さえても何の意味もなく、続けて尻痴漢を愉しまれ、感じさせられる。

【なにそれ、抵抗のつもり？ 意味ないよ、パンツ丸見えだもん】

(言わないで……♡ また♡ 視姦で……感じちゃう……♡)

【結界張っててよかったね♪ じゃないとエロパンツ穿いてるのが、しかびしょびしょにしてるのがこんな大勢にバレてたところだったよ】

(好き勝手……言われてるのに♡ どんどん、感じて……♡)

こんな男の子の……痴漢♡ なんか♡ 私が♡♡ あ♡♡ また……っ♡♡)

「……………っ♡♡♡」

言葉責めと共に激しく尻を揉まれ続け……マルティナは再び絶頂。前回ほど深いアクメではないが、尻肉を下品に痙攣させ、絶頂したのが少年も容易に分かる反応をしてしまう。

【……もしかして、もうイッたの？ お尻が弱いの？ それとも痴漢がそんなに好きだった？】

「……………っ♥♥」

言い返せず、悔しさに尻を震わせるしかない。せめて人混みが早く動いてくれれば……と願うが、人だかりに動きはなく……まだ続行可能と見た少年が、手の動きを変える。

下着の股間部を引っ張ってズラし、ぐちゅっとした粘音と共に秘部が露わにされる。外気に晒された牝部が、次は温かい何かを宛がわれる。

【結界内だからバレないし……お姉さんドスケベだから、いいよね？】

(ま……まさか——)

ずぶ……っ♥

「あ……………つつ♥♥」

——挿入。あろうことか、少年は周囲に人がいる密集の中、マルティナを犯したのだ。

有り得ないにも程がある事態に、マルティナの思考は混乱する。しかしそれ以上に肉体が肉剛の暴力を悦び、非常識すぎる交わりもすんなりと受け入れてしまう。

【やっぱ準備できてたね。あっさり啜え込んじゃって……それでいてこの締め付け……！】

(こんな♥ 人前で……♥ 男の子……啜え込んでるなんて……♥)

ぱんっ♥

(ひあぁっ♥♥)

【エロすぎるでしょ、この痴女マンコ！】

罵られながら突き上げられ、動かない唇の代わりに心の中で嬌声を上げる。

学園のために来たはずが、騙されて痴漢され、逃げたと思えばまた痴漢に犯され痴女呼ばわりの仕打ち。屈辱で堪らないはずなのに、牝肉は雄棒を包み込んで離さず、射精を促す締め付けを何度も繰り返してしまう。

(痴漢♥♥ 痴漢に犯されるの♥♥ 気持ち良っ♥♥ ちがっ♥♥ 私は♥♥ こんな、こと……っ♥♥)

【痴漢に犯されてギュンギュン締め付ける痴女マンコめっ！ イキそうなんですよ？ 出してあげるよ……ありがたく痴漢中出しで受精しろっ！】

(じゅせっ♥♥ やめ……)

ぱんっ♥ ぱんぱんぱんぱんぱんぱんっ♥

「ああああ……………♥♥」

(イク♥♥ また痴漢でイク♥♥ こんな場所で犯されて……受精させられるのに♥♥

嫌なのに♥♥ 惨めなのに……♥♥ 私……………♥♥)

体験版はここまでです。続きは製品版で！